

小・中国語科における基礎・基本の指導と 総合単元づくりとのかかわりに関する研究(IV)

—メディアリテラシーの育成を想定した小中一貫の国語科単元づくりの試み—

山元 隆春 佐々木 勇 杉川 千草
中山 貴司 居川あゆ子 木本 一成

1. はじめに

私たちは、小中一貫の国語科単元づくりについて、過去3年間、次のような取り組みを行ってきた。

- ① 小中9年間の国語科カリキュラム試案をつくり、主に「文学的教材・音声言語活動」の単元で実践し、成果や課題を見つける。
- ② 小1～中3に「私の家族の誕生日」というテーマで課題作文を書かせ、学習者の言語生活の実態と認識力・表現力の段階的な変容を探る。
- ③ 中学1年で「他者の視点から創作文を書く」単元をつくり、理解と表現の関連指導、生活文から創作文へという文種の変更、語り手になる過程に着目した授業を試み、成果や課題を見つける。

このような取り組みをとおして、徐々に次のようなことが分かってきた。

- a. 発表の仕方を工夫した音声言語活動は、文学教材の読みの変容を促すために効果的であった。
- b. この度の実践や調査では、学習者の認識の発達に顕著な違いが見られたのは、文学教材では小3と小4の間で、作文教材では小4と小5の間である。
- c. 創作文を学習者が語り手になる過程としてとらえることによって、他者の視点の発見、出来事の意味の再発見、自分のことばの自覚化という学習を促進する可能性がある。

さて、これまでの3年間の取り組みは、文学的教材、音声言語活動、作文の領域で行ってきたが、国語科全体の中での領域のバランスを考慮すると、説明的教材を主とした単元開発も必要である。また、広島大学附属三原小学校・中学校では、2003年4月より開発指定校として新領域「国際コミュニケーション」を設定し、

異文化理解とメディア学習に取り組むことになった。国語科は、この新領域を支える教科として、(たとえば、メディア学習と説明的教材の学習は密接な関係にあることを考慮すると)重要な役割を担うことになる。このような理由から、本年度は、メディアを使った表現教材と説明的教材を中心とする単元づくりを試みることにした。

2. 研究の構想

(1) 子どもたちの実態

① メディアの受容の実態

子どもたちは、メディアが発する情報をどのように受けとめているのだろうか。

ある金融会社のドラマ仕立てのCMを子どもたち(中3)に見せ、それが何を表現しようとしたものを問いかけると、多くの者がそのストーリーを的確に答える。さらに、ユーモアを交えながらかなり誇張されて描かれていることも承知している。子どもたちは、「虚構」も「ユーモア」も理解した上で、このCMを解釈しているのである。したがって、このCMを見たからといって、すぐこの金融会社への関心が強まることはない。しかし、何のためにこのCMは作られたのか、このCMに隠されたメッセージは何か、についてはほとんど無頓着である。

また、中2の生徒にイラク戦争開始前の約2ヶ月間、新聞スクラップをつくらせてみた。戦争に突入するかもしれない緊迫した状況を、新聞をとおして理解させたかったからである。しかし、多くの生徒は新聞からこのような緊迫感を読み取ることはできなかった。また、切り抜きに添えて書いている感想も、観念的に戦

Takaharu Yamamoto, Isamu Sasaki, Chigusa Sugikawa, Takashi Nakayama, Ayuko Igawa, Kazushige Kimoto : A Study on the Integrated Curriculum Development Including Learning of the Basics in Elementary and Junior High Japanese Language Instruction(IV)—Developing learning units for enhancing media literacy in elementary and junior-high Japanese language instruction—

争反対を述べたものでしかなかった。世界中の多くの人が戦争反対を唱えているにもかかわらず、なぜ戦争をするのか、その理由や背景を新聞の記述を手掛かりに考えてみよう、また、新聞はこうした疑問に答えるような内容になっているかどうか調べてみよう、という姿勢はほとんどうかがえなかった。新聞が伝える一つひとつの情報を吟味し、つなぎ合わせて、世の中の真実を再発見していくという姿勢に乏しい。

子どもたちは、世の中で起こる出来事、それを伝えるメディア、メディアが伝える情報の中味、それを受け取る受容者の特徴、などの一連の関係を理解した上で、情報を適切に受け取る姿勢にかけているといえる。

② 説明文の読みの実態

子どもたちは情報に対していつも無関心で受動的か、という点必ずしもそうとはいえない。たとえば、小6で説明文「エネルギー消費社会」(学図)を学習していた時、エネルギー消費を抑制する解決策の2番目として取り上げられていた「産業を一極集中から地方に分散して輸送に消費されるエネルギーを節約する解決策」について、納得できないとする反応があった。確かに、その児童の指摘のとおり現在の社会構造を考えた時、実現不可能な解決策である。このような鋭い反応にでくわすと、説明文の読みの力がついてきたと早合点しがちである。しかし、実際にはこの反応は、授業の話し合いの文脈の中で偶然に発せられたものである。テキストの記述内容を分類し、相互の関係をとりえ、筆者の意図を推測する、という基礎的な読みができていないわけではない。

また、中1に児童作文「私たちの読書生活」(小6、光村)を用いて、作られた表と記述内容を吟味させる授業を行ったことがある。用いた教科書の本文には、調査結果の表と作者の意見が次のようにある。

	男子	女子	合計
物語	6	9	15
伝記	6	4	10
科学読み物	5	2	7
民話	1	2	3
その他	1	1	2

……このことから分かったのは、何かを調べたり、資料として本を利用したりする人より、楽しむために読書している人が多いということです。……

意見に対応するには、表は「調べるための本」「楽しむための本」に分けて示した方がよい。このようなことを授業の中で学ばせようとしたが、生徒の反応は

あまり芳しくなかった。調査者の意図によって、調査の仕方や表のまとめ方が変わってくるということについて、基礎的な知識や技能が不足しているのが実態である。

③ 実態の整理

子どもたちの実態は、整理すると次のようになる。

- ア. メディアが伝える情報を概括的に素早く処理する能力に優れている。ただし、個々の情報の関連性やその背後にあるものをとらえる力は弱い。
- イ. メディアの特徴についての理解は、発達段階によって異なる。ただし、中学生になっても、伝えられた情報の吟味・分析をとおして、メディアの立場や意図を明らかにしていく姿勢は弱い。
- ウ. 文学的文章を読む力(象徴的な認識)と比べて、説明的文章を読む力(論理的な認識)は、全体的に弱い。記述された内容がある枠にあてはめて形式的にとらえるような思考は出来るが、内容相互の関係を表現や推測される筆者の意図と照らし合わせながら柔軟に論理をとらえていこうとすることが苦手である。
- エ. 論理的に読むこと以上に、論理的に表現することが苦手である。問題の把握と整理、根拠と意見、要約や引用といった論理的な表現技術を系統的に身につけさせるまでに至っていない。目的によって情報の選択・加工を行うなどの主体的な姿勢は特に不足している。

(2) 研究の目的

本研究では、実践をとおして、「メディアを用いた表現単元」または「説明的教材を中心とした単元」を開発するためには、どのような要件を備えておく必要があるかを明らかにしたい。

特に、この度は、次の点に着目した単元づくりや授業実践を行うことにする。

① 情報発信の立場の体験

情報を発信する活動を主とした単元を作り、実践することを通して、情報を発信する立場(メディアの視点)から、メディアの特徴、メディアによって伝えられる情報の特徴を理解させる。

② 言語情報以外の情報への着目

情報として、言語だけでなく、絵、写真、図表などを用いた表現をさせる。言語情報を分析・吟味した経験を、言語情報以外の情報に対して援用することによって、情報を受け取ったり発信したりする力を高める。

③ 書き出し・書き直しによる読みの深化拡充

説明的教材から読み取ったことを、文字・図・記号などを用いて書き出したり、書き直したりする(図式化)などの表現活動をとおして、論理的に文章を読み取る力をつける。

④ 相互交流による他者理解

学習者相互で交流しあうことによって、作品をよりよいものに作りかえたり、不完全だった初発の読みを確かな読みに変えたりしていくとともに、情報を交流しあうことの意味について考えを深めさせる。

(木本一成)

3. 実践例1

(1) 単元・授業の構想

① 単元名 メディアを生かす「広告をつくろう」

(小学校4年)

② 単元について

本単元は、自分たちの伝えたいことを、的確で効果的な表現にあらわす力を養う学習である。広告には、大変吟味された言葉が用いられているだけでなく、絵や写真とコピーとの組み合わせやレイアウトにも、見る人を引きつけるためのさまざまな工夫がなされている。そのため、広告をつくることは、相手を意識して伝える力を育てたり身の回りの言語表現に目を向けさせたりするためにふさわしい学習である。そこで、次のことを手だてとして授業を行うことにした。

ア 他者の言葉との出会いの場をつくる。

身の回りの言葉との印象的な出会いの場をつくり、言葉に対する感覚を磨かせ、日常生活の中の言葉に、子どもたちの目をひらくきっかけとする。

イ お互いの考え(表現)を交流する場を設ける。

単元のそれぞれの段階で交流の場を設けることによって、学習への意欲や見通しを持たせたり、自分たちの表現を吟味させたり、それぞれの表現のよさに気付かせたりする。その際、交流の目的意識を明確にし、個やグループでの自分(たち)の考え(表現)を持たせてから他と交流させることで、他の表現に学ばせ、お互いの表現の幅を広げたり深めたりさせる。

ウ 実の場に生きる総合的な単元構成をする。

国語の授業と日常生活の中での言葉の学びとをつなぐために、学んだことを生活の場に生かすことのできる総合的な単元構成をする。題材を身近なものにするなど、目的意識をしっかりと持たせてから、必要感のある学習を進めさせるようにする。また、自分たちの学んだことが生活にどう生かされたかを確認させ、学習の達成感を味わわせたい。

③ 単元の目標

○ 自分たちの伝えたいことが相手にはっきり伝わるように、見る人の興味を引く表現の広告をつくることのできるようにする。

○ 広告の受けとめ方や活用の仕方、見方について、自分の考えを深めることができるようにする。

○ いろいろな広告にふれたり友達と交流したりすることによって、表現のよさに気付いたりより効果的な表現を考えたりすることができるようにする。

④ 単元の計画(全12時間)

第1次 みんなで広告ウォッチング ……2時間

第2次 8学級広告会社 ……8時間

第3次 制作発表会 ……1時間

第4次 ふり返りとまとめ ……1時間

(2) 実際の授業の様子

<第1次> みんなで広告ウォッチング

授業に先だって、教師の方で、コピーやレイアウトなどに工夫が見られ、子どもたちにも内容が理解しやすいと思われる新聞広告、学校や駅構内に掲示されていたポスターなどを集めておいた。そして、壁面に新聞広告やポスターを掲示した教室で授業を行い、広告にはどんなことがどのように表現されているかを見つけさせるようにした。

P: カップラーメンが地球のまわりを取り囲んでいるので、「こんなに有名なんですよ」ということがわかります。

P: カエルのキャラクターを使ってカエルにしゃべらせておもしろく紹介しているし、赤の文字で目立つように書いているのでいいと思いました。

P: 「ドキッ」は驚きの言葉で、早めにライトをつけることをすすめて、身近によくいそうなおじいさんを描いていてわかりやすくしています。

P: 付け加えて「ドキッ」が大きく書いてあるので、どきっとするほど危ないから、それほどライトが大切だと書いてあるし、他の情報もあるので見がいがあります。

その後、「広告をつくろう」ということを提示して、広告表現の工夫について整理し、今後の学習の大まかな計画を立てさせた。また、広告をつくることについての意欲を尋ねてみたところ、39名中18名は、「楽しそう」「自分たちのつくった広告を見る人の反応が見たい」「自分たちの力でみんなに理解してほしい」などの理由で「つくってみたい」と答えたが、後の子どもたちは、「つくりたいけど、むずかしそう」「何の広告をつくったらいいか見つからない」「みんなを引きつける工夫がわからない」などの理由で、あまり乗り気ではなかった。そこで、制作への見通しを持たせるために、教科書教材で広告制作の流れを確認させたり、課外で身の回りにあるいろいろな広告を観察させ、自分の引きつけられた広告をお互いに紹介させたりした。

<第2次> 8 学級広告会社

まず、だれに対してどんなことを伝える広告をつくりたいかを出し合わせた。その結果、学級の楽しさをアピールする広告、子どもたちが自主的な活動として行っている「会社」の広告、「動物愛護」などの公共広告、三原市の名物をアピールする広告などのグループに分かれることになったので、各グループで制作計画を立てさせた。

次の時間は、デジタルカメラを使って、広告に必要な写真撮影を行った。広告制作に入った段階では、制作に対する意欲があまり高いとは言えなかった子どもたちだが、ここに来て一気に盛り上がった。そこで、どうして気持ちが変わったのか、今の心境を子どもたちにいくらか尋ねてみた。

P：私は広告のアイデアがすぐに浮かんだから最初からつくりたいと思っていました。

P：広告ウォッチングをして、どういうふうが目立たせるとか写真を入れるにはどういうふうにしたらいいかわかってきました。

P：はじめは作り方が全体的によくわからなかったけど、私達のグループでアイデアがよく出てきたから、前思っていたことは、今は全然思いません。

P：自分は絵が苦手なので、写真を入れてもいいことになったので簡単になりました。

P：一人でやるよりも、みんなでやった方が楽しいし、作業が榮々進みます。

P：グループでつくとともにめそうな気がしたけどグループの二人といっしょにやると、すごい広告ができそうです。

4～8の
かたもみ会社へ
レッツゴー!!!



毎週木・金曜日に10分間やります。(1人1分間) 火・水・木・金曜日のどれかにポスターとして、1人3分間やります。(1・2・3週間休むことがあります) 中原・新谷・小川坂・原・奥田があなたのかたやこしをみます。

かたもみ会社グループの広告

広告原稿がある程度できた段階で、広告交流会を行い、各グループの表現意図にもとづいて、いくつかのキャッチコピー案をお互いに検討させるようにした。

「かたもみ会社へレッツゴー」

「かたもみ会社に行ってみよう」

「かたもみ会社はあなたを天国へ連れて行きます」

たとえば、「かたもみ会社」グループのキャッチコピーについては、次のような意見が出された。

P：「レッツゴー」と「行ってみよう」は同じ意味なので二つを合わせたらいいです。

P：「天国」は引きつけるにはいいけど、「天国のような気持ちよさ」というふうに変えた方がいいと思います。

(天国という言葉の意味を) はじめ、誤解していました。ですが、気持ちいいということを全面で表現していいと思います。(Y児)

一瞬「こわい!」と思ったけど、もう一度読んで、ほっとしました。そんなに気持ちいいなら行きたいと思わせませう。(H児)

左のできあがった作品は、他の子どもたちの意見を取り入れて、ことばの重複や誤解を与える表現の問題を解消している。また、次にあげる「地球温暖化」グループの場合でも、同じような様子が見られた。

「頭を冷やして地球を冷やせ」

「今の地球は暑い」

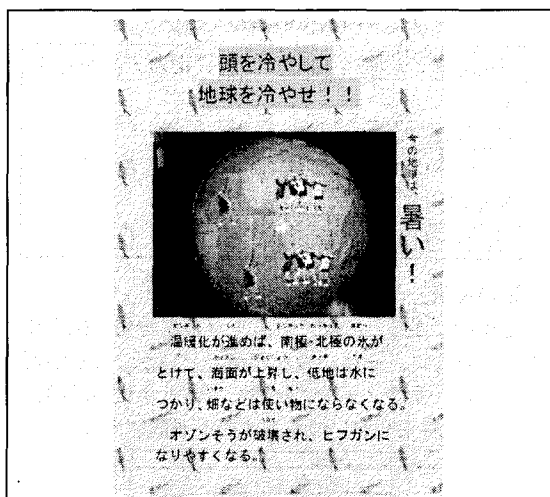
「地球SOS」

P：「冷静に考えて地球温暖化を進ませるな」という意味だから、「頭を冷やして地球を冷やせ」がいいと思います。

P：「今の地球は暑い」はボディコピーに入れたらいいです。「頭を冷やして地球を冷やせ」は状況もわかりやすいです。

意味が深いし、もっともっと読んでみたいようなすごいキャッチコピーだと思います。(K児)

しやれを合わせているし、冷静に考えて地球を冷やせっていうのもよかったですので引きつけられました。(A児)



地球温暖化グループの広告

やっぱりキャッチコピーは自分たちの伝えたいことが表せないとだめだなあとします。自分たちも今回の考え方を参考にしたいです。(Y児)
 「自分は今もうこれでいい」と思っていたら他のグループが「ここをもっとこうしたらいい」というようにアドバイスをしてくれたので、よりよい広告が作れそうです。(M児)

広告交流会を受けて、再度、絵や写真とコピーを吟味して広告原稿を完成させ、マルチメディアの時間を使いながら、コンピュータで広告を仕上げさせた。

<第3次> 制作発表会

各グループの広告が完成してから、制作発表会を行い、お互いのグループの広告表現のよさを学んだり表現方法の工夫を共有化したりするとともに、実際に掲示することによって、自分たちのつくった広告が見る人にどのように受けとめられるか、学習の成果を感じさせるようにした。

<第4次> ふり返りとまとめ

最後に、この単元で学んだことをふり返らせ、他者の言葉とのかかわりの中で自分たちの学びがどのように深められたかを確かめさせた。

(3) 授業をふり返って

新聞広告や身近にあるポスターなどを教材として扱ったことは、子どもたちの生活の中の言葉に目を向けさせることにつながった。しかし、単元の初めの段階では、広告にある程度の興味は持ったが、いざつくるとなると、どのようにしたらよいかイメージが浮かばない子どもが多かった。単元を通して、友達とともに活動することや学習への見通しや手だてを持たせるこ

との大切さを改めて感じた。また、必要に迫られて、デジタルカメラやコンピュータを使う技能を大きく伸ばすことができた。一方で、広告制作には、写真やレイアウト、色などさまざまな要素が含まれるため、そちらの方に子どもたちの意識が向いてしまい、広告に用いるコピーの言葉を十二分に吟味することができたかどうか不安が残る。子どもの発達段階に合わせて、内容をもっとシンプルなものにするか、あるいはもっと上の学年で実践した方がより効果的だったかもしれない。

(杉川千草)

4. 実践2

(1) 単元の構想

- ① 単元名：様々な情報を読もう 「ヒートアイランド」 斎藤武雄 東京書籍（中学校1年）
- ② 単元について

高度情報化社会の到来で、生徒たちは、凄まじい情報洪水の渦に巻き込まれ始めている。雑多な情報の中から自分に必要な情報を適切に選択し、再構成し、発信するという情報活用能力の育成において国語科が担う役割は今後ますます大きくなっていくだろう。そこで、キーワードを見つけ、本文中の図表の意味を読み取りながら、筆者の提案を図にまとめ、次に完成した図を見て内容のとらえ方や、まとめ方などについて、相互に批評し合うことで、内容理解を深める授業を行った。論理的な思考力を高めるためには、説明的な文章、とりわけ論説、評論などの文章における文章の構成や、展開を正確にとらえ、内容を理解していることが大切であると考えたからだ。

③ 目標

- キーワードを見つけたり、文章中の図表の意味を読みとったりしながら、筆者の提案を要約することができるようにする。
- 提案された図を見て、内容のとらえ方や、まとめ方などについて批評し合い、内容理解を深めることができるようにする。
- 文章の内容に関連して自分が知っている情報を発表し、興味関心を持って取り組めるようにする。
- 将来の自分達の生活をイメージし、環境問題を自分のこととしてとらえ、行動できる内容を考えることができるようにする。
- 「ヒートアイランド」について自分の考えを持ち、自分達にどんな行動ができるかを考えるようにする。

④ 指導計画

第1次（2時間）

- 通読と第一次感想。
- 新出漢字等語句の確認。
- 課題確認と目標設定。
- 文章の構成の確認。

第2次（5時間）

- 「ヒートアイランド」(①～④段落)の言葉の意味と目的や種類を整理する。
- 「予測される将来」(⑤～⑦段落)を班ごとに図にまとめる。
- まとめられた図の中から2種類を選び、内容のとりえ方や、まとめ方などについて比較検討することで、より正確な内容理解にせまる。
- 各自が、「対策」(⑧～⑯段落)を図にまとめる。
- 「対策」の内容整理と、「まとめ」⑯段落を行う。

第3次（2時間）

- 「ヒートアイランド」について自分の考えを持ち、自分なりに、どんな行動ができるかを考える。
- 学習の際上手くいったこと、難しかったこと、発見したこと等を交流する。

本実践を行うにあたっては、表1にあるように、事前に二つの教材で、段階的に指導を行っている。

表1 図式化という技能の事前指導

「カラスが都会のハトを黒くする」

- ・ 一つの意味段落を、図と要約文で自由に表現する。

「暴れ川を治める」

- ・ 図、表、絵の違いを考える。
- ・ キーワードのを見つけ方を学ぶ。
- ・ 文章の図式化を図る。(共通点を表し方に気づく。)

生徒の反応は思いのほか良好で、「じっくり時間をかけ、自分のペースで行うことができる。」「自由にまとめていいので楽しい。」といった声が聞かれた。しかし、できあがったノートを見ると、内容に過不足があり、図式化したといえるものは少なかった。また、そこに添えられた要約文は内容が不足しているもの、内容を誤ってとらえているものが多く論理的に「読むこと」に課題があると感じた。

(2) 実際の授業の様子

本単元では、今までの学習を受け「文章の内容から図を吟味する」活動に力点を置いた。

表2 図式化に関わる指導

- ① 図式のモデルを提示し、図式化の方法を考えさせる。
- ② 文章の図式化1を行わせる。
- ③ 分かりやすい図の条件について考えさせる。
- ④ 文章の内容から図を吟味させる。
- ⑤ 文章の図式化2を行わせる。

① 「近い将来」とは何年なの？(図1)

「危機的であると心配される東京の温暖化。摂氏42度を超えるのは、一体いつなのか」ということを学習したときは、次のノートに記述してある年代が話題になり、「近い将来」がいつを指すのかが問題になった。

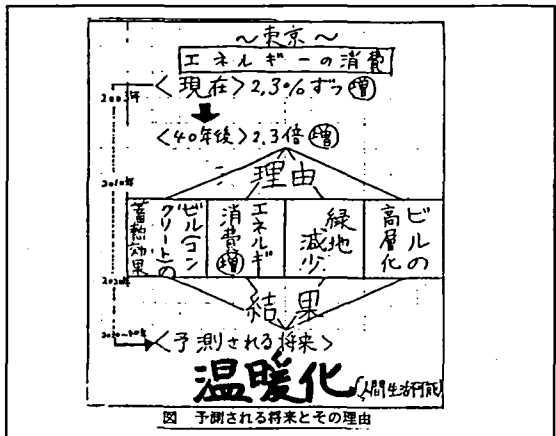


図1 生徒の作図1

P：6段落、東京のエネルギー消費は40年後には、2倍から3倍にも達すると本文中にあります。今年(2003年)だから2043年です。

P：同じです。

P：同じです。

T：でも、3班の図には2031年とあるよ。3班さん、説明して。

P：7段落に2031年東京の夏の夕方6時の気温はとあります。

それでも皆納得できない様子。先の段落に「40年」と書かれているためか。いつから「40年後」なのか、誰か気がつく人はいない？

P：先生、この文章が書かれたのはいつですか？

T：1997年という記述があります。

P：1997年にかかれた本なら40年後は2037年になります。だから2043年は違います。

結局2031年という結論には達したが、授業の中で「40年後」がどんな年なのかについては確認することができなかった。

② 「増加するの?減少するの?」(図2)

次の4班の書いたノートでは、「増大」「減少」という言葉とその表し方が問題になった。4班のAくんは、温暖化の原因を抜き出し、増加の様子を矢印で表現しようとした。Aくんは、「どんな質問でもうけてたつ」と自信満々の様子だった。

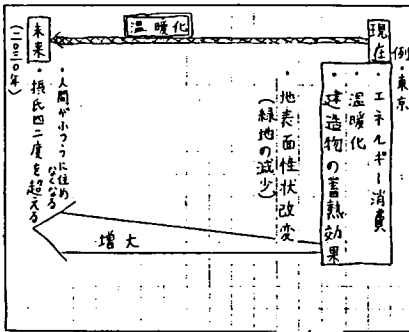


図2 生徒の作図2

ところが、「減少」に比べて「増大」という言葉があまりに強調されすぎていることを指摘する質問が出てきた。

P: ヒートアイランドの原因のうち、緑地は減少しています。増大の矢印があるけどおかしいと思います。
 A: 図を見てください。増加しているのは、四角で囲んである3つだけです。
 P: ふーん。でもちょっとわかりにくいね。位置を変えたらどう?

Aくんたちは、読み取りの段階では、原因として「増大」するものと「減少」するものとをとりえていたが、この二つがどのように関係しあって温暖化につながるのか、というところまでは読み取ることができていなかった。図式化することによって、曖昧な部分が顕在化し、教材文の内容を細かく読み取ることができた。

なお、この授業は、教材文の後半では、「増大」することよりも、「減少」ことに焦点化して論が展開されていることを読み取ることへとつながった。

(3) 授業を振り返って

- 生徒の反応は良好であり肯定的感想が多かった。
 (『ヒートアイランド』で図式化をしてみて、単語

でしか書いてないので要点がよくわかる。」「図式化することで考えが整理できる。」「文章の図式化には内容理解が必要なので、内容理解力がすぐついた。)」

- 作図のポイントとして次の指導が有効であることがわかった。
 - ア. 図の中の情報が多すぎる → タイトルからキーワードを探す (情報の焦点化)
 - イ. 文章になっている → 単語にする (情報の焦点化)
 - ウ. 罫線の使い方 → 関係を示す記号
 - エ. 結論が不明瞭 → 展開の示し方の工夫 (論理的構造を捉えそれを表現する力)
- 図式化することによって、言葉を注意深く読むようになったり、文中のグラフや図にこめられている書き手の意図を意識したりするようになった。
- 今後は図式化により見えなくなるもの(文章表現の巧みさ。筆者独自の文体など)もあることに気付かせる。
- 図式化の学習にふさわしい文章と、不向きな文章がある。効果的に図式化の力を育成するためにも、教材選定と、初級から、中級・上級へと段階的な教材の選択を行う必要がある。
- 最終目標は卒業までに「課題発見→情報収集→情報選択・分析→情報再構成(図式化)→情報発信」を一人で行うことができる力を育成することである。目標達成のためのカリキュラム、指導のあり方を整理する。

(居川あゆ子)

5. 考察

先の実践1, 2をとおして見えてきたことを「2(2)研究の目的」に沿って整理する。

① 情報発信の立場の体験

広告をつくるために既存の広告を鑑賞するという活動は、子どもたちを情報の発信者の立場に立たせることにつながった。言葉の使い方、絵の表す意味、レイアウトの仕方など、作り手の工夫を次々見つけていくことができた。また、情報発信者の立場に立つということは、読み手の反応を考慮する活動を促すことにもなった。たとえば、かたもみ会社の「天国の気持ちよさ」の場合も、受け手によっては誤解する場合があるという感想が出ると、(授業の中では反論していたが)、それが作品づくりに敏感に表れている。

なお、情報発信者になるためには、情報発信者という実感もてるように、環境づくりが重要であることは言うまでもない。学校生活の中で子どもたちが自主

的に行っている「会社」という活動と国語の授業を関連づけて実施したのは、そういう点で効果的であったと思われる。

② 言語情報以外の情報への着目

第1時のポスター鑑賞の時から、子どもたちの関心は言葉よりも絵や写真などの映像情報に向いていた。このことは、ポスターづくりの過程でも変わらなかった。授業者が、言葉による表現を重点的に指導しようとしたにもかかわらず、子どもたちは、デジタルカメラ、コンピューターなどの映像機器を使った言葉以外の情報（絵、写真）の操作に多くの時間を費やした。情報社会において映像がもたらす影響を再確認することになった。もっとも、自分たちの思いを言葉だけで表現するには未だ発展途上であるという子どもたちの実態を考慮すれば、映像情報が子どもたちの表現を補ったととらえることもできる。また、映像情報を手がかりにして、言葉を吟味する学習へと発展させる可能性もある。さらに、映像を作成した撮影者の視点に着目させれば、子どもたちに出来事をとらえる新たな視点を学習させることにもつながるだろう。

③ 書き出し・書き直しによる読みの深化拡充

子どもたちはテキストから読み取ったことを図式化するために、ずいぶん苦労していた。何度もテキストの該当部分を読み返し、書き込みをしながら一つの図を作っていた。漠然とした初発の読みは、このような過程をへて、少しずつはっきりとした読みへと変わっていった。図式化するという発想が、繰り返し読み直すことを促し、精確に読もうとする態度を促したといえる。

また、図式化することで子どもたち一人ひとりの読みは、目に見える形で顕在化することになる。そして、図式化したものは見比べることによって、読みの吟味を促すことになった。「ヒートアイランド」では、「増加する」という言葉を過大評価した図を書いたために、温暖化の四つの要因がどのような関係で取り上げられているか、筆者のどのような意図が推測されるか、という読みへと深めていくことができた。

④ 相互交流による他者理解

広告づくりも図式化の学習も、授業の中でお互いの作品や意見を交流することを大切にされた。これは、よ

りよい作品を作るために、より深い読みとりをさせるために有益であると考えたからである。相互交流によって、十分とはいえないかもしれないが、その目的はおおよそ達成することができた。

また、相互交流は、他者の考えを知ることとおして他者理解を促していることも再確認することができた。作品の共同制作の過程で生じる人間関係上の問題の解決、作品の形が整っていく過程で再発見される他者の立場や他者の視点、そして、作品の完成や読みの変容が生まれた時に感じる喜び、これらの体験は、子どもたちに他者と学び合うことの意義を自覚させるとともに、より豊かにより多角的に他者を見る見方を育てていると思われる。

(木本一成)

6. まとめ

メディアリテラシーの育成は将来にわたる国語教育の研究と実践において重要な課題である。私たちはこれを従来からの取り組みの延長線上に位置づけた。

実践例1（杉川実践）では、広告を作るという活動を通じて読み書きの実践能力を高めることが、実践例2（居川実践）では「図式化」を通して文章の読解スキルを高めることがそれぞれめざされていた。いずれも、ことばを用いた文化実践(cultural practice)を通しての学習であったと考えることができる。小・中国語科の9年間を通して、国語科単元学習を進める中で、どのような文化実践を通してリテラシーを育てていくべきなのか、ということを試行錯誤しつつ明らかにしていこうとする取り組みの一環である。

「今後の課題」の④にも述べたように、今後は、こうしたことばの文化実践が、相互交流を介してどのように他者理解・相互理解に結んでいくのかということ、あるいは、いかなるかたちでことばによる人間理解の基礎となっていくのかということを探求していく必要がある。それが、私たちのコミュニケーションを支える力の解明へとつながっていくことは確かであり、国語科はいかなるかたちで異文化理解とメディア学習を支える力になるのかという問いをさらに探る営みになることも確かである。

(山元隆春・佐々木勇)